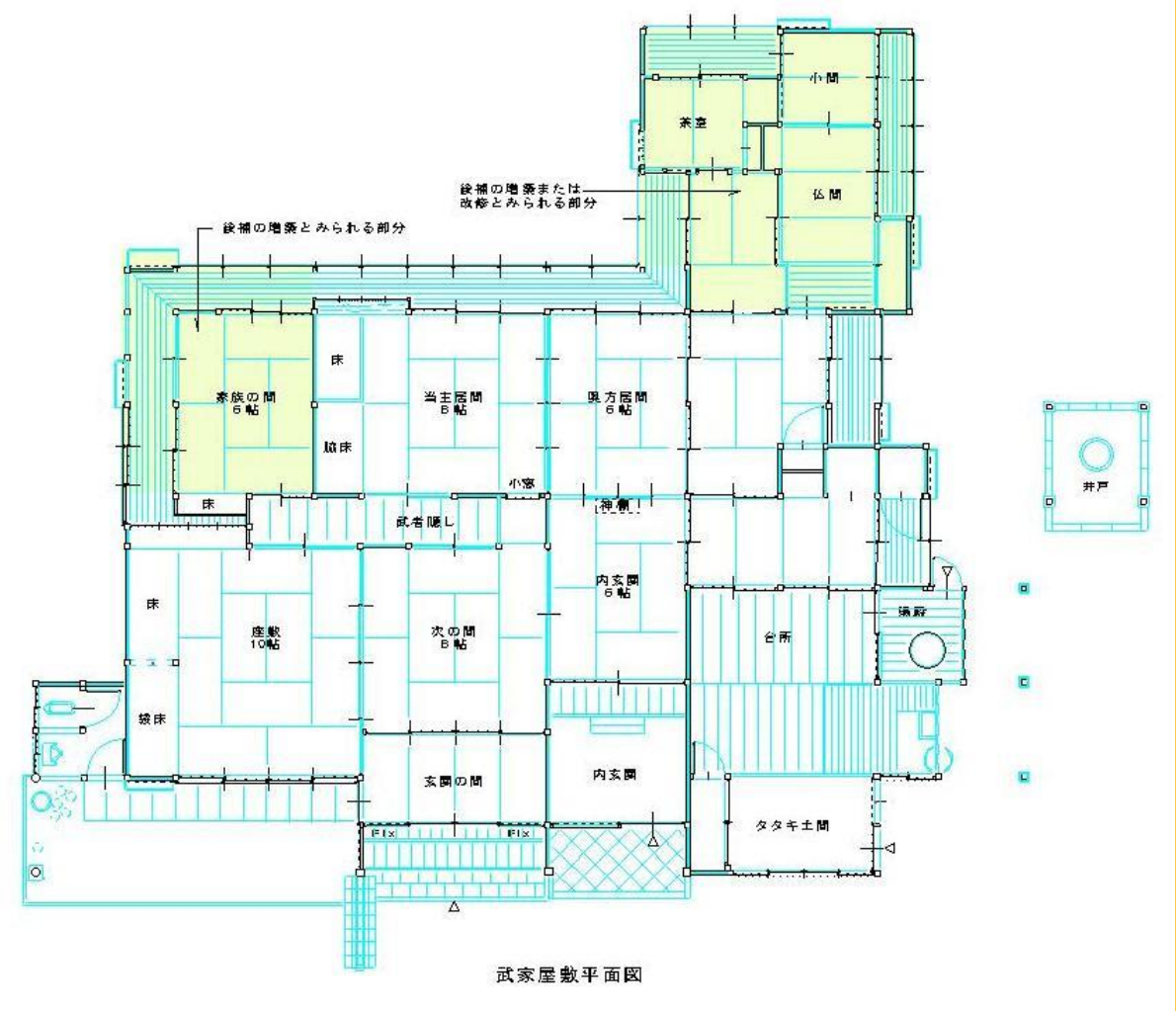
第 22 回　松江市指定文化財（建造物）　武家屋敷

江戸期の武士の屋敷で現存するものは、松江にもそう多くはありません。さらに、江戸時代の面影をそのままに保つものと言えば、塩見縄手の武家屋敷と根岸家（小泉八雲旧居）ぐらいのものでしょう。

武家屋敷と呼ばれているこの建物は、江戸時代には松江藩の六百石程度の中級武士に与えられた屋敷でした。あくまで藩からの貸し出しですから、勝手にいじくりまわすことも原則としてできません。ですから、建築されてからそう大きく変わっていないと思われていました。なるほど客用の立派な玄関の間を持ち、座敷、書院、内玄関があって昔風の台所、風呂、そして裏側の家族用の住居も、武家の暮らしをそのままに再現するかのように配されています。



武家屋敷平面図

武家屋敷の平面図（測量・作図は松江城部会建築史グループ）

ここ数年来、古文書や絵図の調査が急ピッチで行われてきました。その結果、知られていなかった武士の屋敷絵図もいくつか出てきました。それらと塩見小兵衛も住んだと言われるこの武家屋敷を比べてみますと、間取りに共通したものが見られるものもあります。しかしそれらに比べこの武家屋敷がいかにも小さいとも感じます。中級武士の住まいにしては小さい、部屋数も少ないように思えます。ひょっとするとこの屋敷ももっと大きく、部屋数も多かったのではないかという気持ちもあって、詳しく調査してみました。前々から一部の屋根の勾配が、異常に緩いのも気になっていました。

調査してすぐにわかったのが、奥の座敷の北側に位置する家族部屋と呼ばれる部屋は、後で増築されたものだということでした。それもかなり最近の増築です。たぶん、昭和になって住まれた方が不便を感じて増築したものでしょう。その増築に伴って、屋根も架けなおして緩くされたものだということも分かりました。座敷と家族部屋の間は武者隠しとして紹介されています。たしかに、現在の天井よりも高い天井の跡が出てきました。ですが武者隠しであったのかどうかは分かりません。むしろ縁側のようだったでしょう。

武士の屋敷は石高によって変わってきます。しかし、場所によっても変わってくるようで一律にこの石高ならこの広さと言うわけにはいかないようです。御堀に沿った屋敷には船を敷地内に入れる池のようなものが配されている場合もあります。山を背にしたこの塩見縄手一帯と平地の部分ではまた違った作り方があったのでしょう。しかし、石高の割に屋敷が小さいという考えはまだ捨てきれません。もっと大きかったかどうかは北側に張り出した小間の部分をもっと調査する必要があります。

江戸時代の建物はまだ分からないことだらけです。出てきた絵図、あるいは元からある物、そして発掘によってわかった断片などをつなぎ合わせ、松江の江戸時代を浮き彫りにしていきたいと思っています。

（平成 24 年 7 月 2 日　松江城部会　足立正智）